

# モノと空間 Searching Between Physical Substance and Space

工芸



空間造形



環境造形

Craft



Sculpture

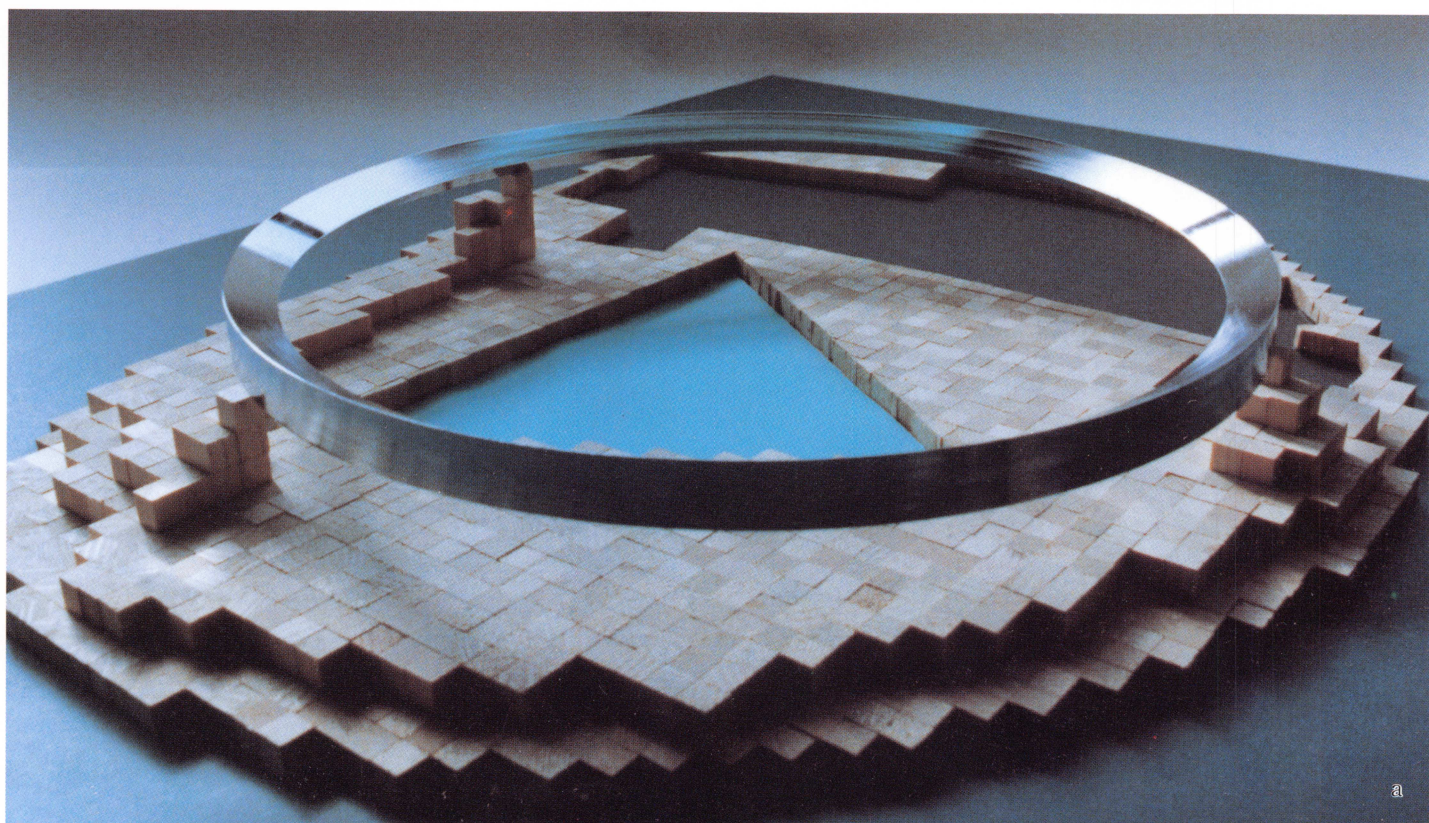
→Environmental Design

松井勅尚 Tokinari Matsui

人間がつくりだしたモノは、すべて人工物である。人間が心にイメージしたから「かたち」になった。我々はその人工物に囲まれて生活している。そして、その「空間」が我々の美意識を決定している。このことを今一度問い直し、(かつて自然と共生してきた)我々日本人の魂を揺り動かす力を「モノ」に宿すことが、今重要であると考えます。  
それは…点(・)ではなく、線(→)で思考すること…。

## I. 中間領域／結界 interspace/kekka

モノが置かれることにより、空間は規定される。日本人はモノそのものよりも、目に見えない領域を大切にしてきた。物欲に捕らわれている今の我々にとって、この記憶を覚醒させることは、重要なことではないだろうか。私は、人々の意識が空間に向かうかたちを模索した。



この計画は JR 名古屋駅東口前ロータリーのモニュメントをデザインするコンペに提案したものである。この空間の特徴は、限定された不定形のロータリー、それを取り囲み旋回する車と、(将来的に高層化が加速するだろう)ビル群であり、風土性の消滅した典型的な都市空間であることを体感した。私はこの設計にあたり、人々が高層ビルから鳥瞰する姿を十二分に意識した。生命である人間にとって本質的に必要なものは、母なる大地とそこを潤す水であり、それはあくまで水平方向への広がりであることを巨大な三角形の水場(滅びてしまった日常)と階段ユニットによる石積みで象徴した。その宙天にステンレスの円環を浮かべ、大地への結界とした。ステンレスの鏡面は常に今という時代を映し込み、人々にハレ(非日常)の場を出現させる神鏡として機能させる。これが、いかに非日常性を持続させるかの問いに対する私なりの答えであった。





c

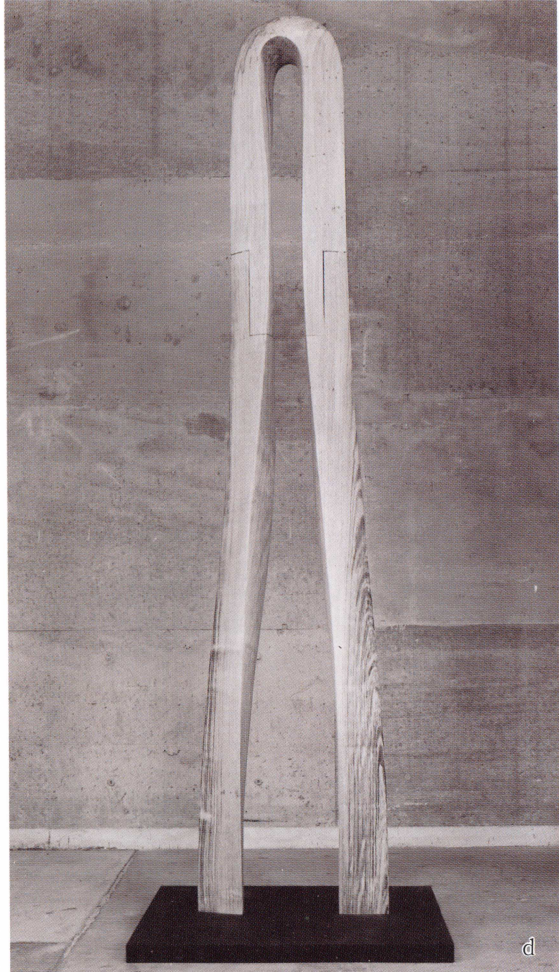
#### 環境造形（モニュメント）

日本の都市空間における彫刻の在り方が、私にとってのメインテーマであった。可能な限り現地に足を運び、その空間を体感し、その中からいかにハレ（非日常）の場を出現させ、人々の精神を高揚させるランドマークとして機能させることができるか。また、その非日常性をいかに持続させるモノを提示できるかが問題であった。



b

「風土と彫刻」というテーマ設定に賛同し出品したモノである。野外展の出品条件には必ず「野外展示に絶え得るもの」とある。私はあえて木の円環により表現し、天と地を結ぶ結界とした。なぜなら我々日本人は、「滅びの美学」を持っている。散りゆくもの、老いてゆくものに「あわれ」を感じる心がある。風土により育まれた、この我々の精神を具現化したかった。



d



e

- a 中間領域…結界○△□  
（名古屋駅前モニュメント設計競技計画案）  
1987  
ステンレス、石（インド砂岩）、水  
7000×35000×35000
- b 中間領域IV…結界○  
（第11回現代野外彫刻展計画案）  
1985  
ステンレス、木（クリ）、水  
800×5000×5000



私は青森で行われる野外彫刻コンペのため、その空間を体感すべく雪深い青森を訪れた。その厳しい環境に、人間は自然の一部であることを再認識させられた。このモニュメントは、太陽を象徴するステンレスの円環をそれとは対極にある雪が抱き止めるかたちをイメージしたものである。白大理石上面は、青森における平均積雪ライン上端を示し、スケールとして機能する。私というセンサーが、時間や季節の経過がより重要な意味を持つ雪国を体感した結果として提示した。



■ c 柱Ⅲー結、中間領域

1983

木(クス)、ステンレス

1500×1300×1300

■ d 中間領域Ⅵ…結界Ω

1985

木(セピター)

2700×900×500

■ e 中間領域Ⅷ…結界△

1986

木(セピター)、鉄

1700×1700×1700

■ f 中間領域Ⅹ…結界○

1987

木(合板)、ステンレス

1700×1200×500

■ g 中間領域…結界▷◁

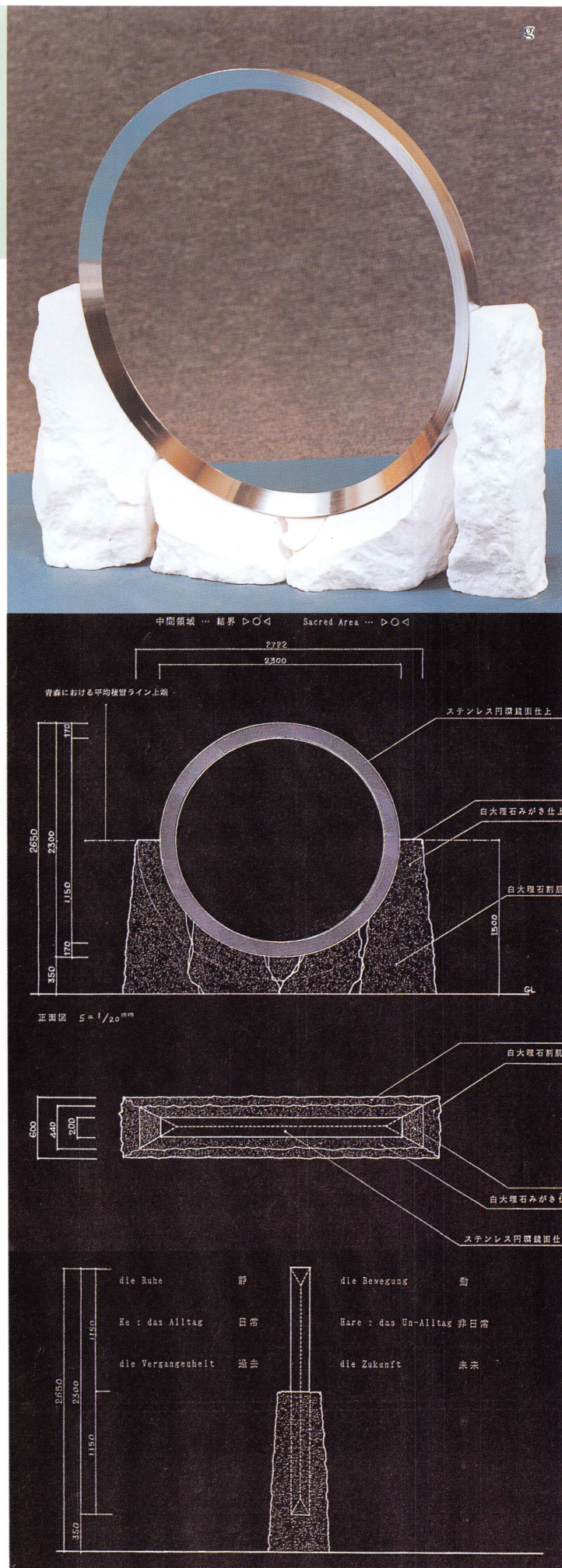
(青森 EXPO1988記念現代野外彫刻展計画案)

1988

ステンレス、石(白大理石)、雪

2650×3000×600

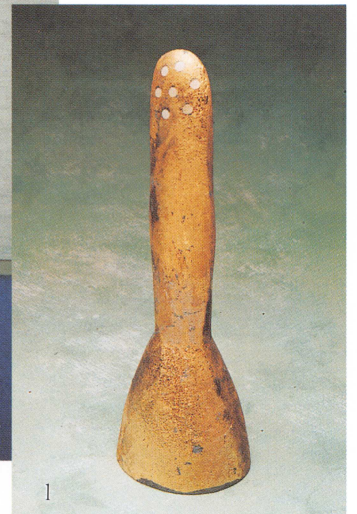
\* f からの展開





## II. 原風景 landscape

たとえば、仏像が発信するエネルギーの秘密は一体なんだろう。それは信仰心だけではない…何か日本の風土から立ち上がったモノの存在が、我々の精神を振動させるのではないか。私のメインテーマは、空間に振動を起こす発信体としてのモノのかたちへと移行した。



工芸（生活の造形）  
ハレ（非日常）とケ（日常）  
は不二であり、そのつながり  
への興味が日常生活のモノ  
（工芸）へと私の意識を拡張  
した。それは人々の精神に静  
かに浸透してゆき、感性を覚  
醒する大切な要素となるので  
はないだろう

■ k 闇に触れるあかり「月山」（計画案）

1989

行燈

真鍮

300×450×150

\* i からの展開

■ l 闇に触れるあかり「ながれぼし」（計画案）

1993

行燈

真鍮

333×121×99

\* j からの展開

■ h ランドスケープ…むくむく

1988

木（合板）、強化プラスチック

1800×1300×1000

■ i LANDSCAPE…ツツツツキヨ

1989

木（クス）、金箔

1800×1200×1000

■ j LANDSCAPE. ウレ P

1990

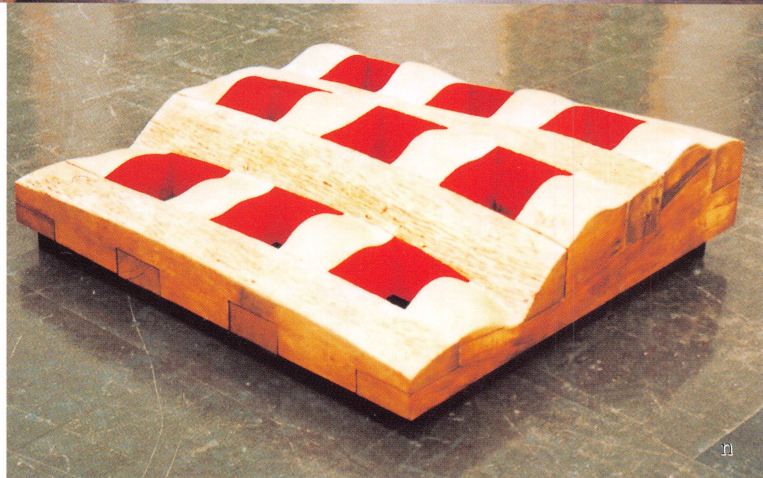
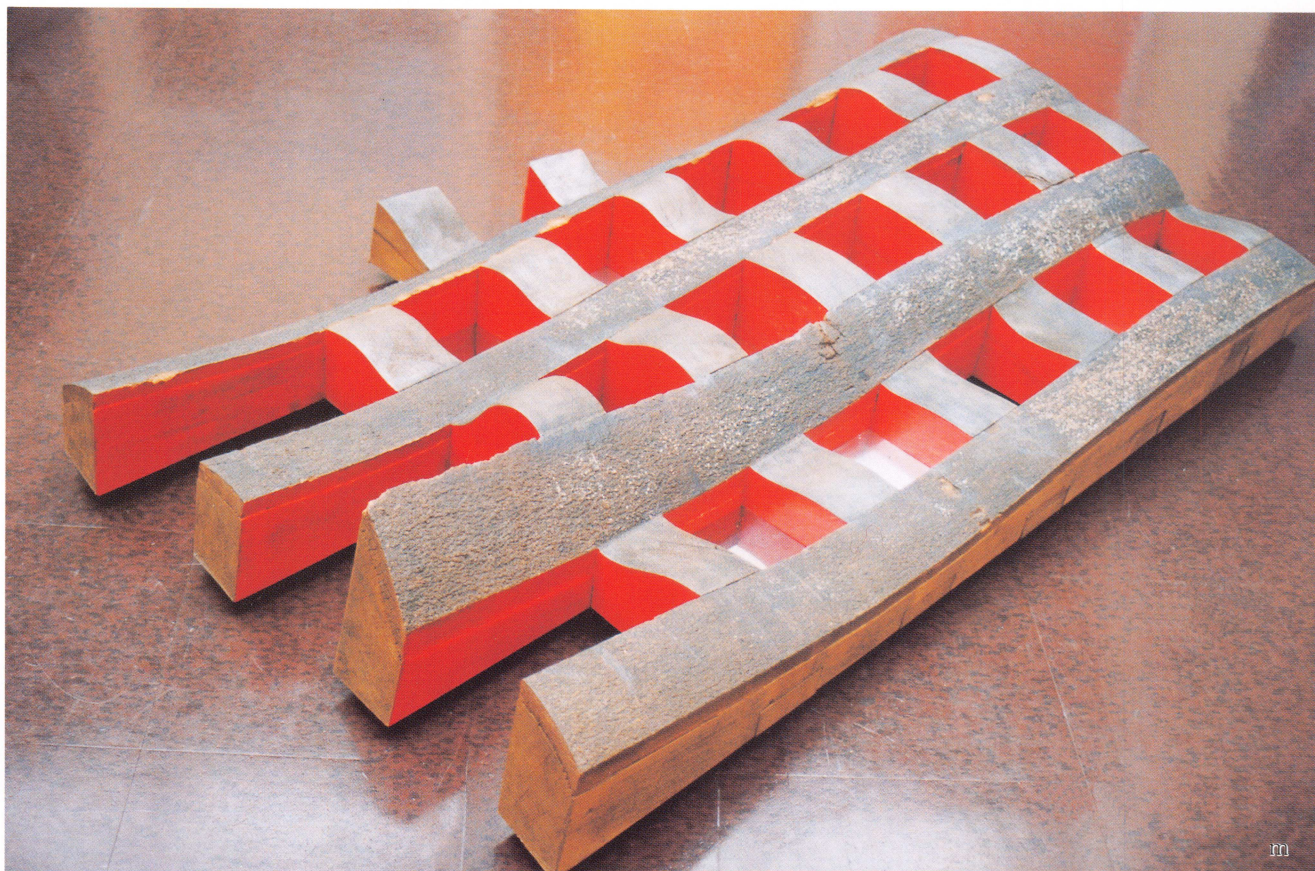
ウレタン、強化プラスチック、金箔

2000×900×900



### III. 木=気 ki

「私とは何か。」を思索するとき、日本人である私を無視して通ることはできない。均質化が進む中、ヒトとしての多様性を満たす日本人の知的独自性とは何か…。それは豊かな森林（自然）を背景として培われてきた木の文化ではないだろうか。日本人にとって木は気（生命エネルギー）である。



■ m ランドスケープ…origin

1993

木（エノキ）、鉛

300×1800×1000

■ n ランドスケープ…origin II

1994

木（エノキ）、金箔

300×900×900

■ o 物語を記憶する家具「EGG.HEAD」

1994

スツール

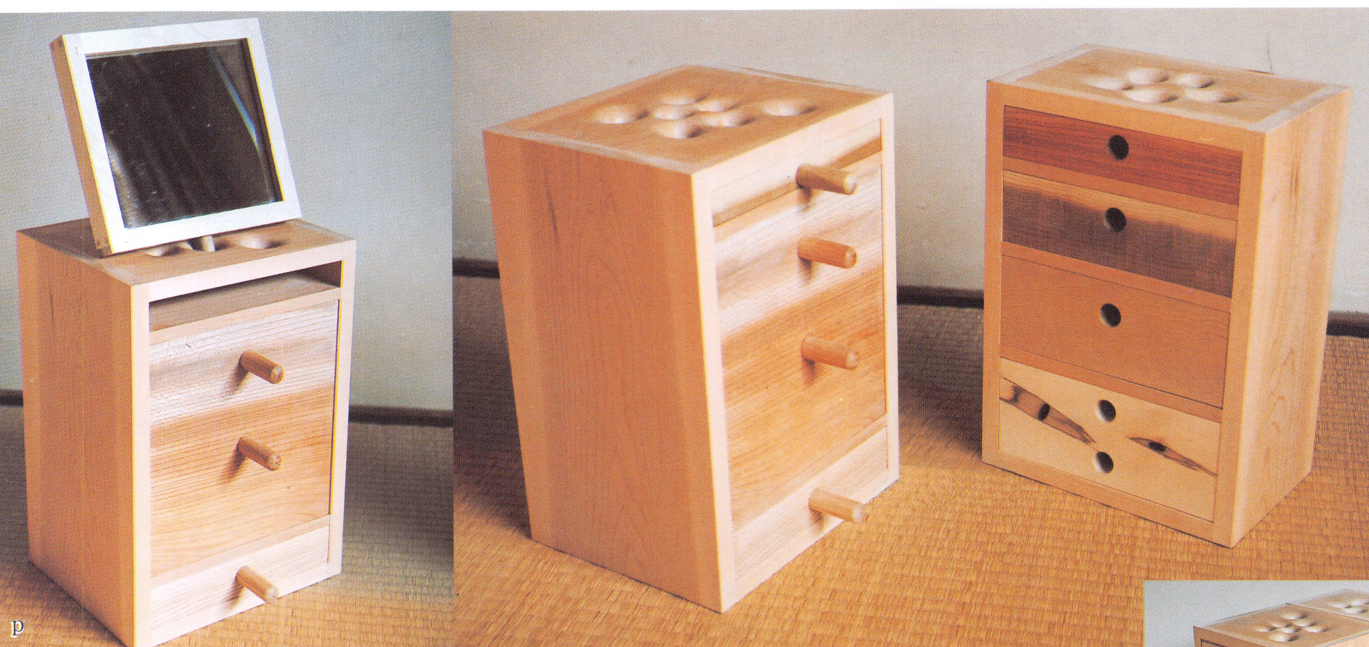
\* mからの展開

木（ブナ、イエローボプラ）

730×380×330（580sh）







- p 物語りを記憶する家具「ADAMTOEVE」  
1995  
鏡台  
本体（カツラ）  
抽出（ホオ、ケヤキ、シオジ、チャンチン、キハダ、クリ、トチ）  
340×350×240
- q 物語りを記憶する家具「EGG.EYE」  
1995  
イヤリングボックス                      \* mからの展開  
本体（キハダ）、収納部（トチ、エンジュ）  
310×230×72
- r 物語りを記憶する家具「HOTARU」  
1995  
照明付ウオールキャビネット  
木（キハダ、クルミ）  
580×320×200

置かれたモノが空間を振動し人々の精神を揺り動かすかは、人間とそのモノとの関係性の中にある。モノが溢れ、使われないモノの中で生活し、ハレが日常化してしまっている現在、人々に必要なのは、欲望の引算ではないだろうか。今（1995～）、私は屋台の研究（本学紀要第3号掲載）を通して、畳む文化に注目している。畳むことにより空間の意味性が失われ、そこに新たに置かれたモノは強いメッセージ性を持つことができる。この空間認識こそ日本文化の独自性であり、この風土から生まれるあらゆるモノは、この空間とのつながりを持つべきであろう。我々は、あまりにもハレの場には永遠性を求め、また日常（ケ）にはその逆をしてきてしまったのではないか…。